



ポルトガルにおけるキャンドル点火の様子
© Pedro Costa/Lusa

世界道路交通犠牲者の日

毎日のように、世界のどこかで、交通犯罪によってこの表題のような事態が起こっている。これらのニュースになるはずの出来事のいずれもが、死亡例であろうとなかろうと、かくも「日常茶飯事」になってしまったがゆえに、報道さえされなくなってしまった。世界中では、交通犯罪によって毎日3400人以上の人々が亡くなっており、毎日万単位の人々が後遺症となる障害を負っている。これらの出来事が負傷の当事者とその家族・友人・地域社会にもたらしている悲惨さは計り知れない。

横浜カーフリーデー実行委員会 ycfd.org

全国交通事故遺族の会 www.kik-izoku.com

持続可能な地域交通を考える会 sltc.jp

世界道路交通犠牲者の日は、交通犯罪によって世界全体で何百万人もの人々が亡くなっているという事実を認識し、交通犯罪が及ぼす遺族への破滅的影響や、本人とその家族、社会に及ぼす傷害に対する社会的関心を引き出すための機会を年に一度、提供するものである。

なぜ世界道路交通犠牲者の日？

イギリスのロードピースという道路交通犠牲者のチャリティー組織が、11月の第3日曜日を「道路交通犠牲者を追悼する日」と定めて、毎年記念することを1993年に開始した。以来、この日が遵守され、ロードピースや欧州道路交通犠牲者連盟やそれらの多くの関連組織によって世界中に広がっていった。2005年10月26日の国連総会で、世界の道路交通安全の改善に関する決議が採択された。この決議で、毎年11月の第3日曜日を道路交通犠牲者の記念日と定めたのである。世界道路交通犠牲者の日は、交通犯罪が地域社会に与える負担の大きさを広く社会が認識し、私たちの健康と発展を阻害するこの大問題の制御に着手し、発展させ、犠牲者を支援することなどが必要であるということを強調する年に一度の機会を提供するものである。



300 組のクツは毎月イギリスで交通犯罪で亡くなっている人の数と同じで、交通犯罪の悲しみを象徴している。

記念日の目的は、わが同胞の遺族に対して連帯と友情を捧げるものであり、交通犯罪がもたらした惨状に目を向け、この虐殺の終焉を祈念するものである。

Brigitte Chaudhry, Founder RoadPeace, UK, and President, European Federation of Road Traffic Victims

ほとんど全例で技術的にリスクを予防できるにもかかわらず、近代社会はかくも膨大な犠牲者を容認している。殺人と傷害は、あらゆる宗教の倫理的基盤に関係しており、宗教の権威者たちは我々に対して、この不敬をはたらいた兄弟たちと、かれらの贖罪を支える我々の義務を思い起こさせる機会を、この日をもって我々に与えてくれる。

Rolf Strassfeld, Boad Member, RoadCross, Switzerland

南アフリカ共和国は、交通犯罪の多さで世界4位といわれ、無関係な家族はまずいない。交通犯罪で命を奪われた者たちや、子どもや一家の働き手を殺された者たちを追悼するために、年に一日を捧げなければならない。

Moira Winslow, Founder and President, Drive Alive, South Africa

近親者たちには、愛する者を奪われた悲しみを表現し、亡くなった者のことについて語る機会を与えられる。それ以外の者は、これ以上悲劇を繰り返さないために、道では正しく振舞うことを約束することで、これらの者たちに敬意を表すことを忘れない機会とする。

Charalampos Katoglou, Boad Member, Hellenic Association for Road Traffic Victim Support, Greece

「朗報をお伝えします。重傷事件の後の道路はきれいになりました」と、ラジオが報ずる。しかし、その被害者には、家族には何が起こるのであろうか。被害者、破壊された家庭、苦しむ者たち……の長いリストに、また名前が加えられる。世界道路交通犠牲者の日に、これらすべての人々のことを心に留める。そして我々は、すべての道路ユ-ザーに対して安全と敬意と責任を持つ文化の実現に深く関わる。

Angelica Oidtman, Founder & President, Dignitas, Germany

この日は重要である。なぜなら、この大災害に関する情報の欠如が社会的無関心を引き起こしているからである。

Jean Picard, Vice President, STOP-ACCIDENTS, Spain

この記念日は、すべての犠牲者の連携を創る。他の人々は忘れようとするが、それは良くない。この追悼は家族の者にとって非常に重要である。その悲劇について語る必要がある家族、ろうそくに点火したり、儀式を行う家族などにとって。

Jeannot Mersch, President, Association nationale des Victimes de la Route, Luxemburg

交通死に関して沈黙という形で加担することは、集団的虐待の一種であり、歴史の退廃である。なぜなら、私は亡くなった者のことを思い出し、傷つきながら、悲しみを伴って、しかし、愛を持って語ることは、個人的な治療だけでなく、それ以上に集団的予防に役立つと信じるからである。亡くなった者を思いだし、実在した者の魂を呼び起こすのはそのためである。若くして暴力的に姿を消してしまったのではなく、今日でも生きていて、自分の夢を実現できたであろう彼らのことを。

Mauel Joao Ramos, Founder and President, Associacao de Cidadãos Auto-Mobilizados, Portugal

この日は遺族にとっての安らぎという意味で重要な日である。遺族とは、法制度からも役所からも、そして近代社会からも忘れられたかのように見える存在なのである。そして、この日は世界中で起こっている全く予防可能な惨事に対する社会の認識を高める意味でも重要である。

Anne-Lise Cloetta, International Relations, Prevencion de (Accidentes) de Trafico, Spain

交通犯罪で死傷した人の数は、人間が引き起こした惨事のうちに他をはるかに引き離す最大のものとなっている。この記念日は、この死傷者数が全く容認できないものであることを社会に明白にしている。人間としての悲劇という意味でも、経済的コストという意味でも。この記念日は、喪失したものを他者と分かち合う機会ともなる。そして、それによってこれを理解する過程に役立つかもしれない。

Hans van Maanen, Boad Member, Vereniging Verkeersslachtoffers, Netherlands

道路交通の犠牲者にも、他の被害者と同じように、自分たちは一人ぼっちではない、自分たちの苦しみを地域社会が考慮してくれていると感じられるような日、特別な日が必要である。

Jacquers Duhayon, Boad Member, Association de Parents pour la Protection des Enfants sur la Route, Belgium



World Health Organization

FEVR

